
大念寺勝子

ごはんライス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大念寺勝子

【Nコード】

N4661BA

【作者名】

ごほんライス

【あらすじ】

2000字設定。また新たに書き足すかもわからん。

(前書き)

前書き！

イカフライは旨い。ソースをかけるとさらに旨い。

と松雄が言ったんで、勝子はイカフライを作った。好きな男に旨いものを食べてあげたい。当たり前のこと！

しかし、勝子はそんなに旨いのかしらと一個食ってみたらむちゃくちゃ旨かった。あれよあれよという間に全部平らげてしまった。

松雄が帰ってきたとき、勝子は必死に謝った。松雄は別にいいよと言うが勝子のプライドが許さない。勝子は自殺することにした。

そんなわけで勝子は今ビルの屋上にいる。寝転ぶと空が青い。

勝子はもう死ぬんだと考えたら涙があふれて止まらなかった。そしてなぜイカフライごときで死ななくちゃいけないと思いいライラした。勝子は理不尽な女である。完全マニア向けた。

勝子は、頭が痛くなってきた。死への恐怖だろうか。がたがた震えた。歯を鳴らした。

勝子は、階段をおりた。死ぬのなんていつだってできる。まずは生きなくちゃいけない。

勝子は、親友の美代のアパートへ行った。美代は部屋でぬいぐるみをあやしてる。赤ん坊が死んでから頭が少しおかしい。「かわいそうだな」勝子は美代のことを何とかしてやりたかった。しかし美代はアルバイト。あまりお金を持ってない。だから仮に何とかしてやったとしてもお金をもらえない。だから勝子は何もしないどころと考えるがしかし美代は親友だからやっぱり何とかしてやりたい。勝子は美代からぬいぐるみを奪い、床に叩きつけた。「現実を見るんだ美代！」「うわあああん。うわああああん」美代が電話したら警官が来て、勝子に手錠をかけて連れていった。「ちきしょうちきしょう。世は理不尽だ。泣きたい。叫びたい」

留置場を出てから勝子はギターで作詞作曲した。

外は雨が降っていたざあああああああ！

勝子はコーヒーを飲む。歌詞が気に入らず紙をびりびりに破いた。怒りっぽい。もっとカルシウムを摂取した方がよい。

ある日、松雄が浮気した。帰りが毎日遅いので聞いてみると残業だと言う。勝子は悲しくて悲しくてならなかった。松雄が留守のとき、部屋でわんわん泣いた。しかし勝子は前向き。隣の大学生と浮気した。

「勝子さん。離婚しましょう」

「やあよ。あたし旦那のこと愛してるもの」腐っても旦那である。

勝子は大学生を殴った。大学生はわんわんわん泣いた。この世の終わりがきたかのようなえらい爆発音だ。勝子は耳を塞ぐ。もうすべてから逃げたい。消えてなくなってしまうたい。もう何もかもがいやでいやでたまらなかった。

勝子は、踏切の前に立った。しかし電車の偉大な姿を見るとやる気が出てきた。生きて生きて生き抜くと決意した。勝子は燃えた。燃えすぎてあちちちちと叫んだ。

勝子もそろそろ子供が欲しいなと思う。書店で赤ちゃん雑誌などを眺めたため息をついてしまう。しかし、松雄はめんどくさいからいやだとぬかす。勝子は辛い。松雄のキンタマをもぎとってアレを絞り出してやろうかしらと危険なこともちらちらと考える。勝子はストレスになって、包丁を握りしめ、街をさまよった。こうなったら誰でもいいから刺してやりたい。特攻隊だ。道連れだ。

勝子は、前を弱そうな老婆が歩いていたのであいつを刺してやろうと企み近づいた。

しかし誤算であった。老婆は勝子の殺意に気づき振り返った。勝子をすごいパワーで持ち上げた。「うわああああ。怖いいいいい」アスファルトに叩きつけた。「うぎゃああああああ」

とほほほほ。神も仏もない。社会というのは何て理不尽なのだ。勝子は涙が出てくる。赤ちゃん欲しい。

勝子はぬいぐるみを買った。こうなったらぬいぐるみを育てよう。それしか道はない。そう決意し、勝子はぬいぐるみをあやした。「

たけちゃん。おっぱいでちゅよーいい子でちゅねー」松雄は新聞紙の奥からちらちらとその光景を眺め、こりゃいよいよ病院に連れていかにならんかなあと危惧する。

勝子はアホなことばかりやってるから正社員からアルバイトに降格してしまった。

勝子には工作上悩みがあった。人には言えない悩み。読者にさえ言えない。

心を痛め街をさまよった。一体どうすればいいのか。未来はあるのか。

勝子はふてイカフライのことを思い出した。こういう陰鬱なときはイカフライでも食べて忘れてしまえばいいのではないか。悩んだら旨いものを食べ。確か勝子が尊敬する織田信長もそう言っていたような言っでなかったような。

「でもハムチーズカツもいいのよねえ。ううん。難しい。頭がおかしくなりそう」煮詰まってるから頭から煙が出てしまう。文学性がエンタメ性か。勝子は一泊二日の温泉旅行に行くことにした。勝子は二泊三日がよかったが、バイトのシフト上無理だった。はやく正社員に戻りたい。かなわぬ願いだ。今は三人に一人が非正規という時代だ。

美代が首吊り自殺をした。まあ彼女も色々悩んでいた。勝子は親友の急な訃報に怒り狂ってわめいた。

ざあああああああ！

びしょ濡れになって街をさまよう勝子。神も仏もない。松雄は今日も帰ってこない。きっと浮気だろう。あいつは真面目にち○かすだ。

勝子は涙が出るが雨に流れる。

（後書き）

後書き！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4661ba/>

大念寺勝子

2012年1月12日19時48分発行